

# プログラム

プログラムの進行に当たって

日本アイ・ビー・エム株式会社 環境統括本部長 小林 光男

## 「社会とともに」を実現し、地域の輪を創造する

私からは、まずIBMがこの環境シンポジウムに込めている思い入れについてお話しし、続いて午後のプログラムを簡単にご紹介します。  
今回で5回目となる「IBM環境シンポジウム」は、基本的には常に同じテーマをもっていきます。循環型社会を構築するために、企業・行政・市民の役割についての議論を深め、知識としての環境から、社会全体の行動を伴った環境にしていきたいというのがそのテーマです。  
それは私どもの企業理念である、「社会とともに」ということを具現化したいという思い入れでもあります。同時に、この環境シンポジウムを1日だけのイベントに終わらせず、札幌市、北海道庁、北海道の大学、企業の皆様とともに、今後も継続していきたいという思いでもあります。さらに、いままでの開催地や今後の開催地との連携を強め、環境に取り組む地域の輪を創造していきたいと考えております。地域に根ざし、地域の活性化に貢献できるような取り組みを推進していきたいと思っておりますので、よろしくご指導、ご協力のほどお願い申し上げます。



それではセッション内容をご説明します。今回は、約1年半前から北海道庁、大学、各企業の方々を中心となり推進した準備会で、「北海道に特化したプログラムを盛り込みたい」というご要望が強かったため、地域関連の研究発表が10項目あります。全体では12項目となり、これまでの「IBM環境シンポジウム」で最大のセッションになりました。

## 北海道とIBMが取り組むさまざまな先進事例

セッションはA、B、Cに分かれています。

セッションAは、IBMと行政の活動です。A-1は、先ほどからご紹介している「ECOマラソン」の取り組みです。A-2では、企業の環境経営およびCSRはどうあるべきかというテーマで、IBMが進めている環境ビジネスのご紹介をします。A-3では、昨今特に大きな問題となっている医療系廃棄物の不法投棄に関して、呉羽環境(株)とIBMで共同開発しているトレーサビリティ・システムの実例をご紹介します。A-4は室蘭市の取り組みとして、地域環境産業拠点を目指した行政の活動をご報告します。

セッションBは、北海道の地元企業の活動です。まずB-1では、これまで捨てられてきた鮭の皮のコラーゲンを医療系に応用する技術についての発表で、地場産業の素晴らしい事例といえます。B-2では、ホタテ貝やカキの殻、家畜の糞尿などを100%堆肥化するばんけいりサイクルセンターの活動報告です。社長の我満由明さんによれば、こうしたコンポストは農家の方に使ってもらわなければ意味がないので、実際に使われている農作業現場をよく見て、農家の立場になって作ったということです。その結果、できた堆肥はすべて農家に利用されているとのこと。B-3はゼロエミッションです。コンピュータ、家電、自動車といった業界ではよく見られるゼロエミッションですが、この発表では小さな部品の集合体である携帯電話サービスのゼロエミッションが紹介されます。B-4では次期エネルギーに関して、北海道の産官学で共通に進められているコージェネレーションや太陽エネルギーの有効利用、特に北国ならではの冷熱や、地下熱の利用についての研究発表です。

セッションCでは、産官学の取り組みを大学や行政の立場からご紹介します。C-1では、北海道でいままで利用されていなかった資源を循環させる制度やシステムに関する報告です。C-2では、全国一の漁獲生産高を誇る北海道で生じる水産系廃棄物を循環資源として活用していこうという研究をご紹介します。C-3は、北海道特有の雪氷や凍土を保存して、夏の冷熱資源として利用する研究の報告です。C-4では、食の安全・安心を確保するため、食品のトレーサビリティという観点から研究発表を行います。

最後のまとめでは、北海道環境財団の辻井達一理事長が、約700年前にドイツで実際に起こったネズミの害を通して現代人の生活を見直し、市民として、企業人として、行政に今求められていることは何かについて講演を行います。なお、会場の外では地域の行政・市民団体・企業による環境展示も行っておりますので、そちらの方もぜひ併せてご覧ください。